

埼玉将軍山古墳の横穴式石室について

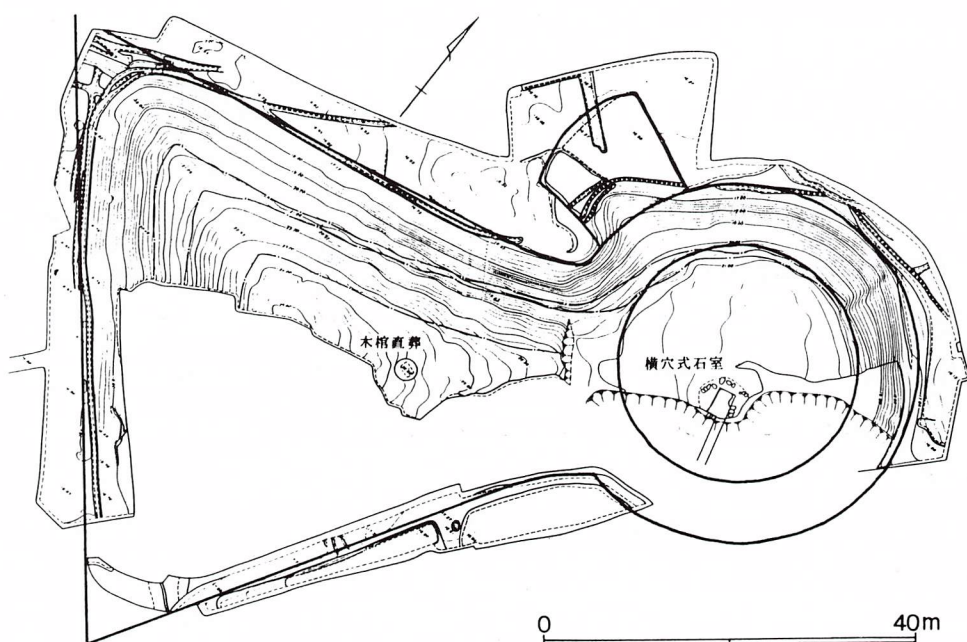
岡 本 健 一

1 はじめに

埼玉古墳群の最も東北に位置する将軍山古墳は、明治27年に地元の人々によって発掘され、銅鏡や馬冑などの豊富な遺物が出土していることで知られる。土取りなどによって、前方部墳丘の約半分が削られたり、後円部の墳丘も上半分が削平されたりして、大きく変形している。これ以上の古墳の崩壊を防ぐため、また稲荷山古墳と並んで、埼玉古墳群中で内部主体の明らかになっている数少ない古墳であることから、歴史教育の資料としても活用するため、古墳の復原整備事業を行うこととなった。

整備を行う上での基礎資料を得るため、県立さきたま資料館では平成3年度より発掘調査を行っている。本稿で紹介する横穴式石室は平成3年度に調査されたものである。なお平成4・5年度に墳丘の調査を行い、全長90m、後円部径39m、前方部幅68mであることが判明した(第1図)。後円部の西側には造り出しが取り付け、後円部径に比較して前方部の長さが極端に長い形態を示しており、この時期の前方後円墳の形態としては特異である。また2重の周堀を有していることは、埼玉古墳群の他のほとんどの前方後円墳とも共通する形態である。

前方部墳頂には木棺小口を粘土で押さえただけの木棺直葬墓を検出したが、副葬品は小型のガラス玉が182個出土したのみであった。前方後円墳で後円部に横穴式石室を内部主体としてもちなが



第1図 将軍山古墳復原図

ら、他に石室よりも簡易な埋葬施設である木棺直葬墓が検出された例は、現在の所、大阪府高石市の富木車塚古墳でみられる程度であり、極めて稀である。2基の横穴式石室が存在したり、竪穴式石室がある例はいくつかみられるが、同墳に葬られる関係の者でも、埋葬施設や副葬品からみて大きな格差が存在していることは、注目に値する。この検討は今後の課題である。

周堀からは多くの円筒埴輪片や若干の形象埴輪片が出土しており、現在整理中である。概していえることは、円筒埴輪の中でも形態にヴァリエーションがみられ、大型のものから中型のもの、3段凸帯や4段凸帯のもの、凸帯の形態も平たいものから角がしっかりしたものまで、さまざまなものがある。埴輪の形式と同時性等を考える上で大きな示唆を与えてくれるものである。

また造り出しに隣接する周堀の中から、須恵器の甕が4個体まとまって出土しており、これらの土器からみて、古墳の築造は6世紀後半に相当するものと考えている。従来埼玉古墳群で最も新しい時期の古墳とされていたが、少なくとも中の山古墳よりは先行する古墳であることが判明した。

2 将軍山古墳の横穴式石室

後円部の削平面において、横穴式石室の床面が検出された（第2図）。

石室は墳丘後円部の（2段築成のうち）第1段目の盛土をしてから床面を設置しているため、現在の地表面からも3m以上高いレベルに作られている。石室は破壊が激しく、玄室は床面と最下段の壁石の一部しか残存せず、羨道部も墳丘土取りによって全く失われている。当初の石室壁面を成していた石は奥壁の2石（ただし西北隅の1石は若干動かされている）と左側壁の3石、右側壁の1石、袖部の3石のみであると推定される。側壁部の控積みに利用された石材も一部残存している。その他は断面で攪乱の痕跡が認められることから、石材取得のため抜き取られたようである。

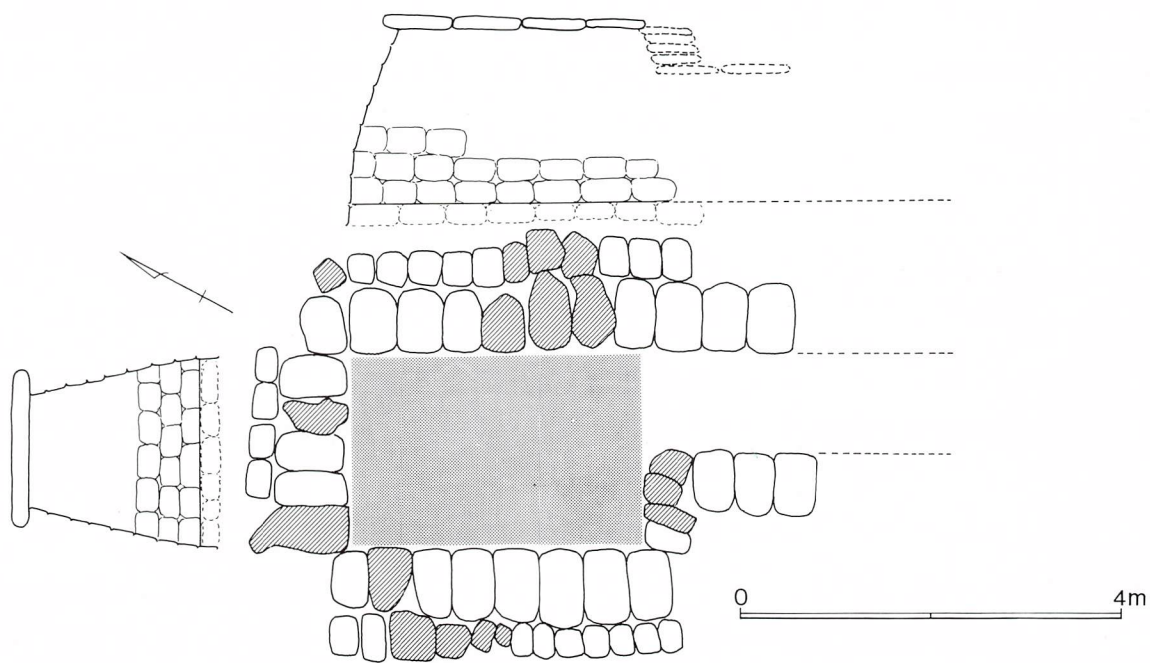
玄室床面には川原の砂利石が敷き詰められているが、石室北東隅付近は大きく攪乱を受けている。敷石は崖面に近い部分では川原石がほとんどみられないので、おそらく玄室のみに敷かれていたようである。玄門部には框石等の施設はみられなかった。これらのことから復原される玄室規模は幅2.0m、長さ3.2m、羨道幅1.0mで、（玄室からみて）右片袖の形態をもつものであることが明らかとなった。側壁や奥壁は石材を小口積みにして、控え積みを伴っているようである。控え積みに使用された石材は、壁面の石材よりも小型である。袖部の石材は側壁や奥壁の石材に比べるとやや小型のもので、袖石に大型の石を立てて使用することはない。玄室の主軸方向はN-28°-W。また石室奥壁部分は後円部の中心よりも、やや南に寄っている。

石室は墳丘築造の際、中段テラスを形成していた黒色の粘土質の土層を積んだ後に、石室の部分には白色粘土と砂利を含んだ黒色土を交互に積んで地盤を固め、石材のおかれる部分は凹状に窪めて、その上に石を積んでいた。袖部に残存していた石材の下層にも同様な処置が施されていたので、片袖式であったことは確実である。

壁面の石材は千葉県金谷付近で採集される、いわゆる房州石というもので、海食孔のある凝灰質砂岩である。その他に床面には緑泥片岩の破片が多く散乱していたが、これらは天井石を形成していたもので、攪乱時に割られたものと考えられる。なおさきたま周辺の民家の庭などに、この石室から運びだされたと思われる、緑泥片岩や房州石が庭石や灯籠に利用されている。また墳丘の調



第2図 将軍山古墳横穴式石室実測図



第3図 将軍山古墳石室復原案

査で文久年間の緑泥片岩を利用した墓石が出土している。現在確認できる緑泥片岩の最大のものは幅0.82m、長さ1.58mである。

明治38年に柴田常恵が東京人類学会雑誌に掲載した論文によると、横穴式石室の状況は、「石槨は比較的堅緻ならずして小孔を有する伊豆石を用ゐて築造し、口は東南に向ひ、敷は石を以て畳み、其空隙の所は粘土を積み、此上に砂を敷きたり」と記述されている。伊豆石というのは、実際は房州石のことで、また床面については、発掘調査では粘土や砂の痕跡は確認できなかった。しかし今回の発掘調査によって、明治の発掘による記述が、ほぼ確かであることが判明した。

以上の事項を総合して、第3図のような玄室の復原案を作成した。玄室規模は幅2.0m、長さ3.2m、羨道幅1.0mで、右片袖の形態を示す。玄室壁面の石材はいずれも房州石を小口積みし、現状では根石部分しか残存してはいないが、現存する石材の大きさからみて、およそ側壁には各7～8個の根石が、奥壁には5～6個の根石が置かれ、順次やや傾きをもたせながら、1段ずつ積まれていったものと考えられる。

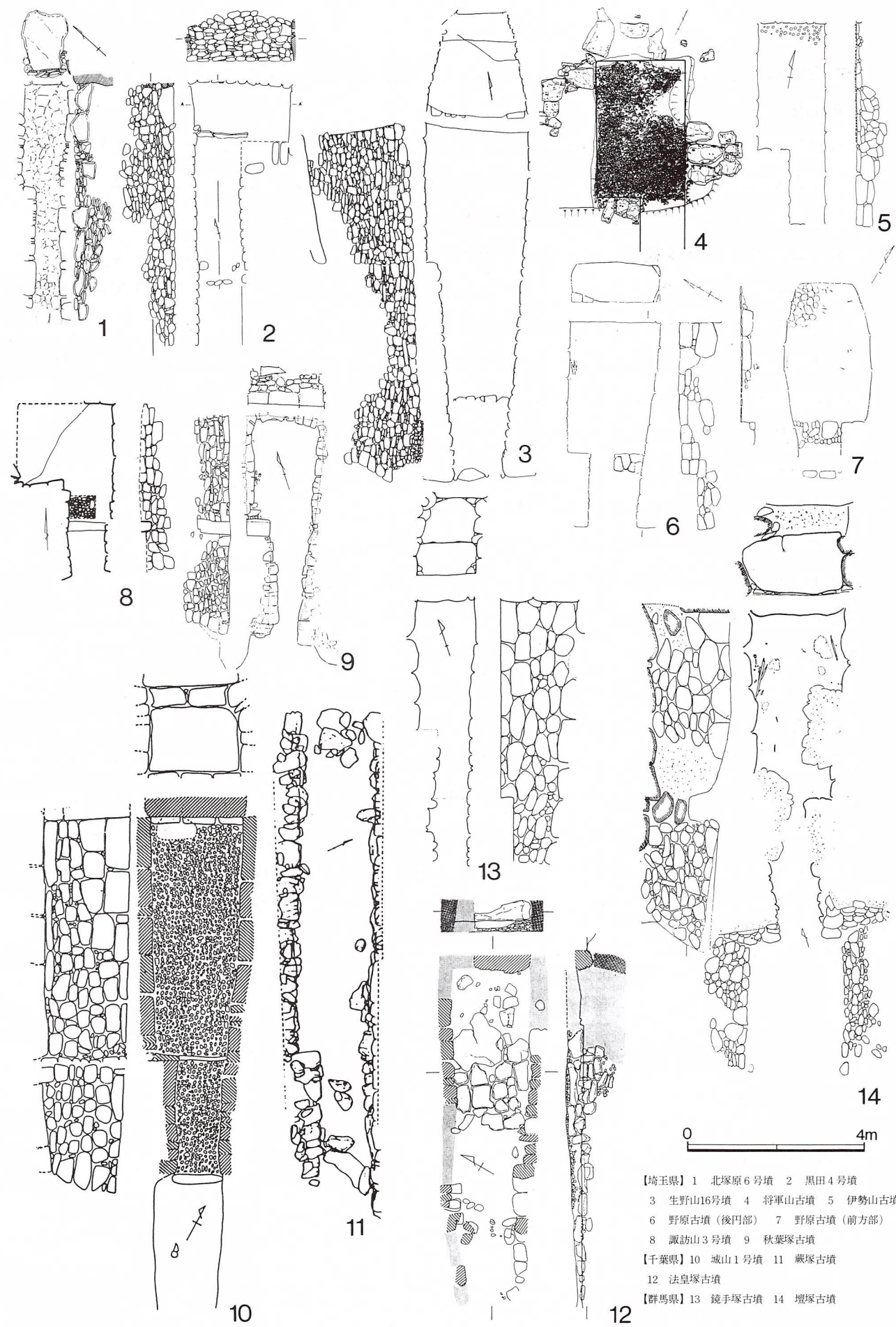
天井部は現在民家の庭に置かれている緑泥片岩を観察すると、その大きさが上述のようであることから、天井幅を約1.2mくらいに想定すると、玄室の高さは床面から約1.8m～2.0mくらいであると推定される。よって壁面の石材は根石から数えると約8～9段くらいになるものと考えられる。玄室の高さは、他の地域の古墳と比較しても妥当であり、人間が立って歩ける程度は確保されていたようである。

問題は羨道の長さであるが、羨道の床面が水平であるとする、墳丘の中段径が26mであることから復原して、約7mであることが計算されるが、玄室の長さが3.2mであるのに比べると、かなり長くなってしまふ。しかし、片袖式の石室でこれほど長い羨道は他に例がなく不自然である。実際は若干玄室に向かって羨道床面の傾斜が下がっていたか、または羨道入り口の前庭部が広くとられていたことが考えられる。石室の築造は中段まで墳丘を築いた後で床面を設定しているため、羨道が傾斜しているとする、墳丘の積み方が困難である。よって羨道は玄室と同じくらいの長さ、約3mで、前庭部が広くつくられていたと考えるのが無難である。羨道天井は玄室の天井とレベル差はなく、フラットになっているのか、見上げ石としての前壁が存在するのかは確かなことは言えない。もし前壁があるとすれば畿内の影響を強く受けていることが指摘できる。現状では確言できない。

3 関東における片袖式横穴式石室

以上のように、將軍山古墳の横穴式石室は片袖式であることが判明した。第4図に埼玉・千葉・群馬の主な片袖式の石室を掲載したので、それぞれの地域における相違点と共通点を概観しておきたい。

埼玉では比企郡や児玉郡に集中し、6世紀前半から7世紀初頭にかけての時期に継続的に作られている。この中で6世紀前半から中葉に比定される神川町北塚原6号墳や花園町黒田4号墳は円墳であるが、他は（東松山市諏訪山3号墳は不明）前方後円墳であることが注目される。とくに踊る埴輪が出土して有名な江南町野原古墳には2基の横穴式石室がある。また東松山市秋葉塚古墳や長



【埼玉県】 1 北塚原6号墳 2 黒田4号墳
 3 生野山16号墳 4 將軍山古墳 5 伊勢山古墳
 6 野原古墳（後門部） 7 野原古墳（前方部）
 8 諏訪山3号墳 9 秋葉塚古墳
 【千葉県】 10 城山1号墳 11 巖塚古墳
 12 法皇塚古墳
 【群馬県】 13 鏡手塚古墳 14 壇塚古墳

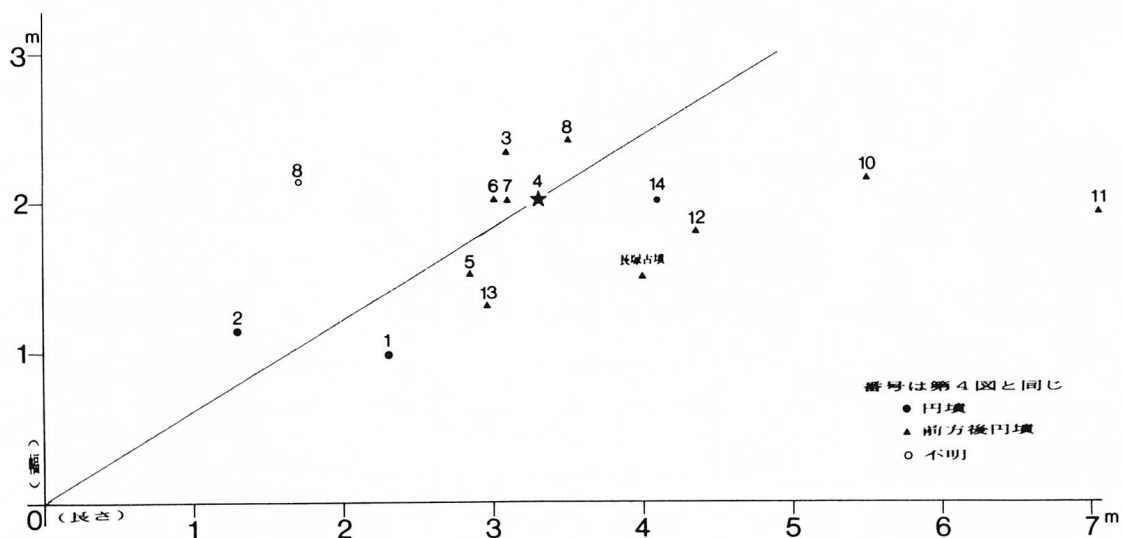
第4図 関東における主な片袖式横穴式石室

塚古墳には、前方部に竪穴式石室があり、將軍山古墳の前方部に木棺直葬施設があったことと共通する現象である。

石室の形態としては、熊谷市の伊勢山古墳がもっとも類似しており、規模や敷石、石材の積み方などで共通する点が多い（第5図）。野原古墳の石室は羨道が一段高くなる形式で、將軍山古墳の石室も同様に羨道が高くなるかどうか不明であるが、玄室のみを取り出せば後円部の石室は類似する。前方部の石室も規模的には同様だが、胴張りを有する点が後出的である。袖部分の石の積み方をみると秋葉塚古墳では大きめの石を立てるようになるが、その他の古墳では側壁の石積みと変わらないようである。大石を立てるのは後出的な要素であり、胴張り形態の出現と前後して6世紀末ころから現われるのではないだろうか。黒田4号墳や諏訪山3号墳は横長の形態を示し、また框石の施設があって將軍山の石室とは大きく異なっている。以上のことから將軍山古墳の横穴式石室の形態は県内では古い段階のものなので、6世紀後半に築造されたとして矛盾はない。

墳丘の形態をみても伊勢山古墳や秋葉塚古墳では後円部の径が前方部の長さ比べてかなり小さいという点で、將軍山古墳と共通している。

このように埼玉県内では將軍山古墳との類似性が指摘されるのは、伊勢山古墳や野原古墳、秋葉塚古墳などでいずれも近隣の地域にあたり、石室形態、墳丘形態、6世紀後半から末ころという築造時期など、多くの点で一致している。またこの地域では6世紀後半より早い時期の横穴式石室は未発見であるので、これらの石室は初源期のものである。7世紀には胴張り式の石室が盛んにつくられていて、その過渡的な形態が野原古墳の前方部横穴式石室といえる。埼玉古墳群の中では、6世紀中ころと推定されている瓦塚古墳では横穴式石室の可能性が小さいことから、將軍山古墳は最も早い時期のものと考えられる。その他県北の児玉郡等に存在する古墳は、上毛地域の文化圏を考えるべきであろう。後述するように、群馬では6世紀初頭には横穴式石室がつくられており、形態的にはやや異なるものの、児玉郡周辺でも6世紀前半には小型の古墳にも横穴式石室がつくられ、それぞれの群集墳での主流は無袖式であることから、片袖式石室は無袖式から派生した変形と考えられる。生野山16号墳は袖幅が狭く、羨道入り口に向って羨道幅が狭くなっていくのは、その影響



第5図 片袖式横穴式石室の玄室規模の比較

であろう。

よって同じ埼玉県内でも、児玉郡周辺の初期横穴式石室は毛野の影響下で築造されたもので、片袖式石室も無袖または両袖式の縦長形態の石室のヴァリエーションと考えられるが、將軍山古墳を含めた比企郡周辺の古墳では、全く異なった規格の石室が導入されたといえることができる。現在のところ天井形態まで明らかなものがないため、確実なことは言えないが、平面形態（片袖、玄室幅／長さ比、羨道幅／玄室比幅など）、框石が無いこと、壁面の石材を小口積みすることなどから、この地域独特の形態を示しており、これは畿内の古式の横穴式石室と類似する傾向にある。埼玉古墳群が稲荷山古墳の鉄剣に代表されるように、畿内との深いつながりが想定されていることから、この類似を無視することはできない。

石材の供給先である千葉では城山1号墳や法皇塚古墳、蕨塚古墳など導入期の石室に片袖式の例がみられる。城山1号墳や法皇塚古墳は6世紀中葉～後半ころとされ、將軍山古墳とは近い時期にあたる。しかし形態的には幅に比べ長さが長いもので、その後の袖の明確でない金鈴塚古墳以降につながる。蕨塚古墳は房州石を利用した石室であるが、より一層長い玄室をもっている。このように、千葉では將軍山古墳の石室とは異なり、独自の地域性をもっている。

群馬での横穴式石室の最も古い例として梁瀬二子塚古墳が6世紀初頭とされ、以降王山古墳や前二子古墳などにみられるように、縦長の長方形両袖式で羨道も細くて長い形態のものが採用される。基本的に群馬で展開する横穴式石室は両袖式または長方形の無袖式が主流である。片袖式の石室は管見にのぼる範囲では、鏡手塚古墳と壇塚古墳である。いずれも將軍山に比べるとやや縦長である。栃木は群馬とのつながりでとらえられ、やはり縦長の無袖式や両袖式の石室が主流であるが、初期段階で片袖式の石室が数基みられる。これらの片袖式石室は両袖式石室の省略形ではなく、地域の中でも独特の形態を示しており、系譜的に問題となる。また山梨では関東諸地域とは隔絶した、独自要素の強い石室がつけられている。東京や神奈川では現在のところ確認していない。

4 まとめ（將軍山古墳石室の位置づけ）

以上、石室の形態、とくに片袖式石室の展開からごくおおざっぱに將軍山古墳の石室の特徴について述べてきたが、いくつかの問題点を指摘してまとめておきたい。

まず石室形態が関東では特殊な要素をもっていることが重要である。前述したように、畿内の古式の横穴式石室との類似性が指摘できるが、石室の残存状態が悪いため明確なことは言えない。しかし関東地域でみた場合、この石室の平面形態は特殊であり、將軍山古墳と近隣の比企郡のいくつかの片袖式石室が、毛野や房総からの文化的伝播によってつくられたものでないのは明らかである。埼玉古墳群の中で半世紀強ほど前につくられた稲荷山古墳の礫槨をみても、將軍山古墳の横穴式石室が前時期の埋葬施設から発展し、横穴式埋葬の観念のみが採用されて変化したものとは考えられず、画期的な変化がおこったものと言える。將軍山古墳以前には埼玉古墳群には横穴式石室がつけられていないとされており、また前述した比企郡の類似した形態の石室は年代的に將軍山古墳よりは下った時期のものと考えられるので、將軍山古墳の石室が受容期の形態を示しているのであろう。関東では畿内と違って、横穴式石室は各地域の首長墓クラスの古墳にまず採用されてから、小型古

墳にも広がるようである。畿内では6世紀後半代にはより袖幅の狭い石室となり、またそれとともに大型の古墳では両袖式の石室が採用されるようになっていく。片袖式の石室は畿内では初源形態として展開していくが、6世紀中ころをすぎると、石室規模の格差が大きくなってきて、玄室空間を拡張するために両袖式石室が登場するのである。よって畿内の石室形態が直接関東に伝播し、6世紀後半の大型古墳である將軍山古墳に、袖幅の広い片袖式の石室が採用されていることは、年代的にやや矛盾するかもしれないが、ここでは石室形態が類似しているという事実を強調するだけに留めておきたい。

石材に房州石を利用していることについては、この埼玉古墳群の地域が石材に乏しいことから、比較的加工のしやすい房州石が選ばれたことが想像される。天井石には秩父の緑泥片岩を利用しているが、この平たい石は石室壁面構築には不向きであると判断されたのであろう。利根川の水運を利用して石材を運搬したものと考えられるが、上流の毛野地域ではなく、下流の房州から運んでいることは、少なくとも房州とより友好的な関係があったことが想定される。それは埼玉古墳群が畿内寄り、そして反毛野体制であったと極論することはできないが、しかし諸々の現象をみると、畿内との関係を無視することはできないであろう。

また、1点注目すべきことは、前方後円墳の前方部墳頂に、後円部の横穴式石室とは別に、竪穴式の石室または木棺直葬の施設がある古墳が集中していることである。野原古墳でも横穴式石室がつくられている。これは横穴式石室への追葬儀礼とは矛盾する現象である。全国的にみても横穴式石室採用の初期段階の古墳で同様な現象がみられるので、石室採用の初期には、追葬儀礼が十分に浸透しておらず、まだ竪穴系の埋葬施設が利用されていたことも考えられる。

以上、將軍山古墳は現在調査中であるため、今後明らかになる事実も多いと思われる。年代的な位置付けを行うにも、豊富な副葬品個々についての詳細な研究が必要であり、今後の大きな課題である。今回は埼玉古墳群の中でも、稲荷山古墳とともに埋葬施設が明らかになった將軍山古墳の横穴式石室について、早急な資料紹介が必要であるとの観点から、石室の概要と若干の問題点を記述することにした。ただ何の解決も得られていないのが口惜しい。

[参考文献]

『第10回 三県シンポジウム 東日本における横穴式石室の受容』1989

『さきたま將軍山古墳と銅鏡 展示解説書』埼玉県立さきたま資料館、1992

『さきたま』No 4、埼玉県立さきたま資料館、1992

『さきたま』No 5、埼玉県立さきたま資料館、1993